

2010年5月12日

東日本区1998~2011ヒストリアン 吉田 明弘

2010 - 2011年度主題

2010-2011 年度の国際・地域・区・部の主題が揃いました。全部東日本区からというのも、日本としては、初めてのことです。

国際会長・藤井寛敏（東京江東）

主題：“Once More We Stand”

“心新たに立ち上がろう”

スローガン：“Build a Bridge to the Future”

“明日への橋を架けよう”

アジア会長・高田一彦（横浜）

主題：“Once More We Stand”

“心新たに立ち上がろう”

スローガン：“Realization of World Peace through Y's Activities”

“世界平和をワイズの手で”

東日本区理事・松田俊彦（東京）

主題：“豊かな奉仕！～変化そして躍進”

“Let's Serve Joyfully! ~Change and Everlasting Jump!”

北海道部部长・中崎孝俊（北見）

主題：“ほっと、ほっと”

北東部部长・亀井幹夫（宇都宮）

主題：生き生き楽しく増えゆくワイズメン

関東東部部长・紺野彦司（埼玉）

主題：地球の未来を見つめ 地域に学ぼう

東新部部长・権藤徳彦（東京コスモス）

主題：『誰もが元気、いのち逞しく！』

あずさ部部长・小山憲彦（東京サンライズ）

主題：“継続こそ力”

湘南・沖縄部部长・鈴木 茂（横浜つづき）

主題：“地域奉仕とYMCA サービスに徹して、ワイズの活性化を”

富士山部部长・宝田昌孝（熱海グローリー）

主題：親睦が輪を作る！～継続そして躍進～

Historian's View 標語と主題

「主題 (theme)」は、ワイズメンの組織のそれぞれのトップが、年度の初めに発表するもので、その方の経験、認識、願い、想いが凝縮されています。

2010-2011 年度の国際・地域・区・部の主題については、国際大会や区大会などの晴れ舞台や、区報、部報などで、その所信とともに語られるでしょう。

文献に記録されている国際会長主題は、1924-1925 年度国際会長 Glenn Beers の「How Better to Serve」が最初です。その後、無い年度もありましたが、1953-1954 年度から毎年掲げられています。太平洋戦争中などは、当時の状況を色濃く反映され、今となっては言わんとするところの分からないものもあります。

日本で区理事主題が、区報に初めて登場したのは1967-1968 年度の坂村友三区理事（東京）の「Each Y'smen for All. All Y'smen for Each」です。毎年度、理事が掲げられるようになったのは、1976-1977 年度の津山貞之区理事（名古屋）からです。かつては歴代区理事もそれほど自身の主題を強調することはありませんでした。

自身の方針を出すよりも国際理事として、国際の考え方を伝えることに重きを置いたように見えます。

最も強調したのは、1973-1974 年度の奈良信区理事（東京山手）です。アメリカ中心であったワイズダムが文字どおり国際クラブに転換する国際憲法を制定の時期でもありましたから、Sherman A. Harmon 国際会長と同じ「Our Future is International」を理事主題として、熱く訴え続けました。

クラブ会長主題を最初にかかげたクラブは不

明です。一般的になったのは 1970 年代後半からでしょう。全部の部が部長主題を決めるようになったのは東日本区になってからです。

日本区時代から「motto」も「theme」も「標語」と訳していましたが、1999-2000 年度の中田靖泰区理事（札幌）が、「標語は不変である国際標語であるのだから、theme は主題としよう」と提案し、実行に移されました。

ですから、私たちがワイズソングで「われらのモットー守る」と歌う「モットー」とは、国際標語の「To acknowledge the duty that accompanies every right（強い義務感をもとう権利はすべての義務に伴う）」だけなのです。

46クラブがオリジナルフラッグを制作

原俊彦・区理事の本年度の具体的な方針の一つであるクラブのオリジナルフラッグづくりの呼びかけに応じて、フラッグを制作したクラブが 2 月末で 46 になったことが分かりました。

このフラッグは、クラブバナー状のもので、それぞれのクラブの活動を、写真を中心として表現し、多くの人にクラブを PR しようとするもので、各クラブは独自の工夫をこらしました

制作したクラブ数は次のとおりです。

北海道部 4、北東部 4、関東東部 8、東新部 3、あずさ部 11、湘南・沖縄部 6、富士山部 10

Historian's View

オリジナルフラッグの PR 効果は、短期間で判るものではありませんし、宣伝広告は、原俊彦区理事の専門でもありますから、申し上げます。

しかし、副次的な効果があったような気がします。クラブメンバーが、どの写真を、どのように組み合わせようかと協議し、コピーを練る中で、自分たちのクラブは何をしてきたか、今後、どういう人たちを迎え入れ、どのようなクラブにしようとしているのかを話し合う、絶好の機会となったと思います。このツールをどう生かすかも、今後の課題でしょう。

第1号の吉田信好・岡田松生について

前号で、東京 YMCA の設立総会に参加した若者のうち、吉田信好、岡田松生について説明ができませんでした。前・区ヒストリアンの齊藤寛さんから資料をいただきましたので、参考にして記させていただきます。

吉田信好（よしだ・のぶよし）キリスト教禁制の高札撤去前に設立された日本基督公会（現・横浜海岸教会）の創立者のひとり。購買組合、出版事業を興す。生没年不明。

岡田松生（おかだ・まつお）22 歳。熊本洋学校でジェーンズの教えを受けた熊本バンドのひとり。政治、教育、貿易にかかわり、小崎弘道とともに霊南坂教会を創立。

訂正 前号の植村環さんの肩書は日本 YWCA 会長の誤りでした。お詫びして訂正します。今後、この欄が常設にならないよう心がけます。

あとがき

ごく個人的なことで恐縮ですが 2000-2001 年度にあずさ部長をお引き受けした私は、主題を「どさ?」「Y さ!」としました。これは 1962 年に朝日新聞に連載された『新・人国記』「青森県」の書き出しから拝借したものでした。後に、新聞史上に残る書き出しと評された、名記者・疋田桂一郎の文はこう始まっていました。

雪の道を角巻きの影がふたつ。

「どサ」「ゆサ」

出会いがしらに暗号のような短い会話だ。

それで用が足り、女たちは急ぐ。

みちのくの方言は、ひとつは冬の厳しさに由来するという。心も表情もくちびるまでこわばって、『ああらどちらまで』が『どサ』

「ちょっとお湯へ」が「ゆサ」

もちろん、当時の「部」に対する問題意識が背景にありましたが、この漢字のない語句を選んだのは、多分、テレくささだったような気がします。